

## 特別寄稿

2003（平成15）年8月28日 午後7時25分、既に、意識がもうろうとし始めておりました。「何でも良いから、思っていることを言って下さいな。」とせがみましたところ、初めて、家族について話し始めました。急いで口述筆記しました。この日は私の誕生日。

我が家族は6人で、子供は4人である。私のきょうだいも4人である。

しかし遺伝的に見ると、私の兄弟は、大酒飲みが1人だけで、あとの3人は、アルコールを全く受け付けない。

さて、私及び私の家内は、アルコールを殆んど受け付けない。そして、全家族をみると、皮膚の色黒の家族と、色白家族に分れた。私は、ちょっと位、顔を洗わなくても目立たない。そういうアドバンテージを持っている。但し、色白でも、色黒でも、誰1人としてアルコールを受け付ける者はいなかった。いずれにせよ、日本人の平均値から見たら、マイノリティーに入ることにはなる。

一体、この世の中で飲みたいのに飲めない、すなわち、我慢しなければならない、そういう場合と、その逆……。

そこまで話して、意識が無くなってしまいました。何を言いたかったのでしょうか。色々想像は膨らみます。

療養中は、常日頃、あくまで自宅に居たいと申ししておりましたが、やむなく、山形済生病院へ、最後の入院となりました。

一瞬、意識が戻った彼に、胸水貯溜による呼吸不全の為に入院したと、経緯を話した時、すでに声が出せませんでした。急いでマジックペンを持たせましたところ、力なく、読み取りが困難な書体ながら、“わかった”、“ありがとう”と最後の言葉を残してくれました。

いつも夢を追い続け、失敗もありましたが、それにもめげませんでした。こんなことも言って居りました。10の仕事をした中で、9つは失敗であったとしても、1つが成功したならば、苦勞よりも、その喜びは充分余りあるものがあると。

常に、ひたむきに、より高きを求め続けました。日本人の気高さ、気品を備えていたと言えるのではないかと存じます。

大島義彦の回りには、何時も、素晴らしい人々が居りました。その方々が、彼を支えて下さった御陰で奔放に生きることができたものと存じます。

“ありがとう”という言葉は、大島義彦と関わりがあった全ての人々に向けられたものです。本人に代り、心から感謝申し上げます。

最後に一言。

義彦さん、不思議で、類い稀な、幸せな人生を本当にありがとう。

2005年9月1日 記

大 島 扶 美

## 追 記

温かい御友情にあふれた追悼の言葉や、思い出の数々をお寄せ下さいました皆様に心から御礼申し上げます。そして御多忙な業務を抱えて居られますのに、公立置賜総合病院整形外科の林雅弘先生と、済生会山形済生病院整形外科の伊藤友一先生が、この様に素晴らしい「大島義彦先生追悼・遺稿集」を編纂・刊行して下さいました。

千の風となって相変わらず忙しく吹きわたっている主人は、きっと、こぼれる様な笑顔で喜んでいてくれると存じます。「よくやってくれたな。本当にありがとう。」と。

私は、涙腺がゆるいものですから、目にしただけで、あふれてくるもので、ほほを濡らしてしまいます。

本当にありがとうございました。お2人の先生に重ねて、心から感謝申し上げます。

又、この追悼・遺稿集の編集を終始見守り続けて下さいました済生会山形病院院長浜崎允先生、小白川整形外科クリニック院長佐本敏秋先生に、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

大 島 扶 美

## 大島義彦の遺言

普通の考えでやれば、その結果はもうそれだけなの。普通のことしかできない。(常識の結論は実証ずみ)

もっと良い結果を生むためには、今やってない新しい方法をやってみることだよ。…ね。

10回やるうちにね、1回は成功するから。…必ず!!

でも9回は失敗するんだ。失敗は良いの。(失敗を恐れることはない。)

今までそうだったよ。色々考えてみて、新しい道を行くだろう。ろくな事が無いんだよ。だいたいねえ、道に迷ったり、遠回りになったりでね…。

でも10回に1回は、すごい道を発見する。それ(喜び、素晴らしさ)はねえ。…あとの9回の失敗を補って充分余りあるんだよ。

2003年1月1日

世界の理性が勝つ世の中にしなくてはいけない。

ロシア革命の中に出てくる人物の歴史をたくさん読んできた。それだけ授業料を払ってきたんだ。レーニンだって、マルクスだって、その時代の誤りがある。

全てを1人の天才ができるわけではない。

1人の考えを振りかざすことのアホらしさ。

毛沢東主義も、世界共産主義も、それは宗教である。

自分としての判断基準を作ってゆかなければいけない。

戦争中4才まで東京の鎌田に住んでいた。

おふくろと2人で畑に居たら空にいっぱい、コンペイトウの様な光が出た。ビューンと地上から探照灯が上った。金平糖の様な光は偵察飛行だった。すぐに長野県に疎開したが、まもなく東京にB-29の大爆撃があった。

戦争程、メチャメチャに壊してしまうものはない。

戦争による環境破壊は桁ちがいだ。

ブッシュやブレアは、ならず者だね。

病院に入院していると、何もできない。何もできないでいることがつらい。

家に居れば、色んなことができる。家で療養したい。

髪の毛や爪も昔は醤油になったことがある。そんなものを残してもむなし。

魂が大切。

何を言ったか、何を伝えたか、その中味に、1億倍もの価値がある。

2003年2月11日

大島義彦

インターネットで「NPO法人山形県トレーナー協会」  
又は「大島義彦メモリアル館」を検索して下さい。  
大島義彦先生に出会うことができます。

## 編 集 後 記

大島先生が逝かれてからもう3年が過ぎようとしています。1年前に3回忌を行い、その時にはこの遺稿集を早々にお届けする予定でしたが、原稿が集まると「もう少しこれも」との思いで、なかなか完成版ができあがらずお届けするのが遅くなりました。

この遺稿集の発行は浜崎允先生、佐本敏秋先生、大島扶美先生の御発案で始まり、伊藤友一先生とコロニー印刷の山口雄二さんの編集のご努力で完成したものです。

この遺稿集を期に、大島先生の直ぐ近くにおいて直接多くを教えて頂いた私達が、これからも大島先生の教えを後輩に伝えるべく努力しなければならぬと心を新たにしているところです。

天国にいる大島先生どうかこれからも私達を見守っていて下さい。

昭和 17年整形外科入局 林 雅 弘

大島先生の3回忌から業績集を編集する作業が始まりましたが、編集委員の不手際で完成が大幅に遅れてしまいました。書面にてお詫び申し上げます。編集作業を通じ大島先生の達筆な文章を読み直しておりますと、改めて先生の先見の明には驚かされました。文章で書かれた内容が10年、20年後にその通りに現実のものとなっております。

編集にあたり大島扶美先生の“一般的な業績集ではなく大島義彦先生にふさわしい型にはめない独特ものにしたい。”との御希望に沿えるよう工夫をいたしました。大島先生の誰にもまねの出来ない美しい文章を堪能していただけるように数多くのエッセイを集めました。また、先生の生きた軌跡をたどることができるように数多くの写真を掲載することとしました。大島先生とともに過ごされた貴重な時間が思い起こされれば幸いです。

編集委員 伊 藤 友 一

---

# さわやかに千の風となって

大島義彦先生 追悼・遺稿集

2006年12月

発行 「大島義彦先生 追悼遺稿集」  
発行発起人会

代表 佐本敏秋 浜崎 允 大島扶美

〒990-8545 山形市沖町79-1  
社団法人 山形ヘルスサポート協会  
山形済生病院 図書室内  
TEL・FAX：023 (681) 9046

〒990-2321 山形市桜田西四丁目1-14  
医療法人 悠愛会  
大島医院 本部内  
TEL：023 (615) 3985  
FAX：023 (615) 3986

印刷 コロニー印刷（山形福祉工場）

〒990-2322 山形市桜田南1-19  
TEL：023 (641) 1136

---